

# W.ユージン・スミスの初期活動について

---

室井萌々

東京都写真美術館 学芸員

# W. ユージン・スミスの 初期活動について

室井萌々

## はじめに

W. ユージン・スミス (William Eugene Smith, 1918–1978) は、1930年代から70年代にかけてアメリカ合衆国で活躍したフォト・ジャーナリストである。東京都写真美術館では現在、約2,000点以上のスミス作品を収蔵している。本稿では、この膨大なスミス作品を調査する第一歩として、スミスが初期に活動した『ウィチタ・イーグル』紙や『ライフ』誌、また、アリゾナ大学付属のクリエイティブ写真センターの W. ユージン・スミス・アーカイヴ資料調査をふまえて、当館収蔵のスミス作品を改めて調査し、スミスの初期活動を再考することを試みる。

スミスの初期活動は、先行文献では通常、スミスが『ライフ』での仕事を始める1938年からであると定義されることが多い。しかしながら、スミスが本格的に写真家としての活動を始めたのは地元紙『ウィチタ・イーグル』に写真を売りはじめることになった1934年以降である。そこで本稿ではスミスの初期にあたる時代の始まりを1934年からであると定義している。

## ジャーナリズムとの出会い

### 『ニューヨーク・タイムズ』と『ウィチタ・イーグル』

W. ユージン・スミスは1918年12月30日、アメリカ合衆国のカンザス州ウィチタにて、穀物商であった父ウィリアム・ヘンリー・ビリー・スミスとアマチュアカメラマンであった母ネティ・リー・スミスの間に生まれた。スミスが幼少の頃、アメリカ合衆国では飛行機産業が時代の最先端をゆくものであった。とりわけウィチタでは航空産業が盛んであり、1928年には同所で航空機産業博覧会が開催された。大西洋単独無着陸飛行に成功したチャールズ・リンドバーグのスピリット・オブ・セントルイス号も展示され大きな注目を集めた。スミスもまたその飛行機の姿に魅了された少年の一人であり、母ネティの勧めによりスミスは飛行機の写真を撮り始めるようになった。

スミスの写真が初めて公の場に掲載されたのは、1934年7月22日のことであった。ウィチタで起こった干ばつの被害を収めた一枚

- ❖1 L.H. Robbins “In the Land Made Desolate by Drought. A Vivid Picture of a World Transformed, Where High Courage Keeps Hope Alive,” *New York Times* (July 22, 1934): 4.

**WICHITAN  
DIES FROM  
GUNSHOT**

**Former President of the  
Board of Trade Found  
with Bullet Near Heart**

**NOTE IN CAR, A CLUE**

Despondent over financial reverses and a big, sharp drop in wheat this week, William Henry ‘Billy’ Smith, 52, prominent grain dealer and past president of the Wichita Board of Trade shot and fatally wounded himself this morning, according to police reports. He was found dying in the driver’s seat of his car parked on Ninth street only 10 feet away from the



**W. H. SMITH**

図2 父ウィリアム・H・スミスの死が報じられた記事『ウィチタ・イーグル』（1936年4月30日号）、Wichita Eagle Archive

- ❖2 “Wichitan dies from gunshot” *Wichita Eagle*, (Thu. April 30, 1936): 1-2.

- ❖3 Jim Hughes, *W. Eugene Smith: Shadow and Substance* (New York: McGraw-Hill, 1989), p.26.

- ❖4 石井妙子「魂を撮ろう ユージン・スミスとアイリーの水俣」文藝春秋、2021年、68頁

- ❖5 母・ネティへの手紙(1936年12月8日)より  
W. Eugene Smith Archive, Center for Creative Photography, University of Arizona.

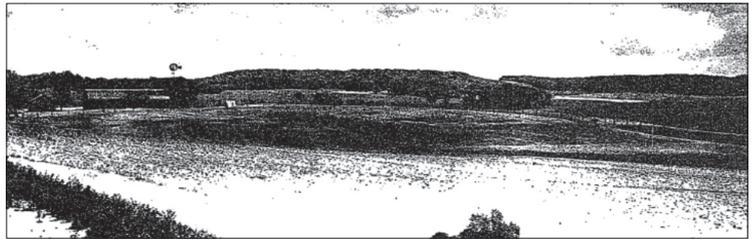


図1 『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された干ばつの写真『ニューヨーク・タイムズ』（1934年7月22日号）、New York Times Archive

が、『ニューヨーク・タイムズ』の紙面に掲載されたのである<sup>❖1</sup>【図1】。この写真が報道的要素を含んでいたことは、この後のスミスの活動の中でも注目し得る出来事であろう。スミスの写真家人生はこの一枚の「報道写真」から始まったのである。

その後スミスは、フリーランスとして地元紙『ウィチタ・イーグル』に参加していた期間を経て、スポーツ欄を主に飾ることになる。およそ2年の間に、地元で活躍していたフットボールやバスケットボール、レスリングや野球などの試合や選手を多く撮影している。

順風満帆かと思われたこの状況が一変したのは、1936年4月のことであった。大恐慌の煽りを受けて、穀物商の経営危機に瀕していた父ウィリアム・H・スミスが自殺したのである。ウィチタ商工会議所の会長を務めていたこともあった父の死は、「ウィチタ市民、銃で自殺を図る」という見出しとともに同日の『ウィチタ・イーグル』夕刊で大々的に報道された<sup>❖2</sup>【図2】。スミスは、当時、学校にいたところ、兄弟から知らされ病院に駆けつけた。既に駆けつけていた記者たちは、スミスが息子だということをその場で知ったという<sup>❖3</sup>。取材現場での記者たちの過剰とも言える取材姿勢に直面したスミスは、ジャーナリズムの在り方について疑問を持つようになった。この出来事をきっかけに、ジャーナリストのありかたについて葛藤したスミスは、最終的には大学でジャーナリズムを専攻する道を選び、その後もジャーナリストとしての活動を続けることになる。この決断に大きな影響を与えたのは、『ウィチタ・イーグル』の記者の言葉だった。「どういうジャーナリズムにするかは、たずさわる本人次第だ。質の高いものになるか、インチキなものになるか。それは、ジャーナリスト個人の問題で、ジャーナリズムそのものではない<sup>❖4</sup>」この言葉が、スミスにジャーナリズムへの信念を再確認させたのである。

同年、スミスはノートルダム大学の報道学科で本格的にジャーナリズムについて学び始める。その最中、母ネティに宛てられた手紙には「僕の役目は、世界の中にある人生模様、そしてそのユーモア、悲劇を捉えること、言い換えれば、人生そのものを捉えるということなのです<sup>❖5</sup>」と記されている。父の死を過剰に報じられたことに対して、スミスのジャーナリズムへのまなざしに変化したことは明らかだ。「人生そのものを捉える」——つまり、人間の「生」と対峙する写真を撮りたいという願望は、既に『ウィチタ・イーグル』の時代から形成されつつあったのだ。

## ニューヨークへ ブラック・スター社での活動と『ライフ』

大学での授業に満足できなかったスミスは、1937年に同大学を退学し、ニューヨークへと拠点を移す。『ニューズウィーク』誌での仕事を経て、1938年にブラック・スター（フォト・エージェンシー）の属託写真家となったスミスは、『ニューヨーク・タイムズ』『フォーチュン』『コリアーズ』『ハーパーズ・バザー』『タイム』などの各誌に4年間で370点以上の写真を寄稿した。とりわけ、『ライフ』とは1939年に1カ月のなかで2週間働くという契約を交わしている。<sup>❖6</sup>『ライフ』においてスミスは、主に国内での人々の様子を撮影している。それは時に舞台写真であったり、スポーツ写真であったり、プロパガンダ写真であったりした。第二次世界大戦の機運が高まる最中、スミスは何度か戦地での撮影を懇願したそうだが、まだ若手であったスミスにその機会が与えられることはなかった。それでもなお戦地での撮影を希望していたスミスは、『ライフ』での仕事を一旦離れ、『フライング』<sup>❖8</sup>に活動の場を移す。

スミスは『ウィチタ・イーグル』時代から『ライフ』誌での活動初期まで、一貫して「人間」を主題とした写真を追求し続けていた。その過程で、スミスは被写体との深い関係性を築きながら、写真家としての視点を磨いていった。しかし、『フライング』誌での約1年間の取材期間中、スミスの撮影対象は大きく変化する。そこでは「人間」はほとんど被写体とならず、主に空中戦における戦闘機同士の交戦シーンが中心となり、空軍兵士の姿を収めることはごく稀であった【図3】。

1943年11月17日、スミスは自身の手記にこう記している。

私が撮影しているのは今の所、それ以上何も含んでいない記録写真であり、魂がない。私はそれを打ち破らなければならな

❖6 『ニューズウィーク』はスミスがニューヨークへと移住して、初めて契約を行った雑誌であった。しかしながら、大判カメラを使用してほしい編集部と小型カメラを使いたいスミスとの間で意見が対立し、1938年にスミスは解雇された。スミスとロバート・コムズによる会話の録音より、1968年 Hughes, *Shadow and Substance*, p.49.

❖7 Hughes, *Shadow and Substance*, p.59.

❖8 『フライング』: 1927年アメリカ・シカゴでウィリアム・バーナード・ジフ・シニア (William Bernard Ziff Sr., 1898-1953) により創刊。航空工学関係を中心に扱う。



図3  
W. ユージン・スミス《無題》  
〈初期作品〉より、  
1942年、東京都写真美術館蔵

❖<sup>9</sup> スミスの手記より(1943年11月17日)  
William S. Johnson, "W. Eugene Smith:  
1938-1951," in W. Eugene Smith: Early  
Work (Tucson: Center for Creative  
Photography, University of Arizona, 1980),  
12.

いし、時々、私は理想主義の代償がとても高いことに気づく。<sup>❖<sup>9</sup></sup>

ここで言及される「魂」とは、スミスが追求してきた「人間の生」を捉える写真表現への想いを指している。機械を通じて間接的に行われる空中戦において、スミスは自身が求める「生」の表現を見出すことができなかつたのである。

## 『ライフ』専属写真家として

その後、スミスは『ライフ』誌の戦争特派員に就任し、太平洋戦線での取材を開始した。スミスの以前の所属先『フライング』誌では空中戦を中心に取材していたが、『ライフ』誌では地上戦に焦点を当てることとなった。『ライフ』誌のカメラマンには政府から特別な許可が与えられ、前線部隊への同行が認められていた。かつては『フライング』誌時代に理想とする写真が撮れないことに悩んでいたスミスが、この新しい環境で、自身の写真哲学と『ライフ』誌の掲げるヒューマンイズムとの接点を見出すことができたのである。

スミスはサイパンの戦い、硫黄島、沖縄戦などに参戦して、印象的な作品を残し、戦場における軍人たちの姿や戦時下の市民の生活を克明に記録することで、スミスが追求してきた「人間の生」を写真で表現することに成功した。1944年6月のサイパンでの取材では、戦場の過酷な現実を写し取るべく、泥にまみれて戦う兵士たちや戦死した日本兵の姿を次々とレンズに収めていった。

そんな中、スミスはサイパンにて民間人による悲惨な集団自決の光景を望遠レンズ越しに目撃することとなる【図4】。その瞬間、スミスの脳裏には、かつて父の自殺を取材していた記者たちの姿が浮かび、自分もまた同じように人々の悲劇を切り取るカメラマンとなっているという深い内省が生まれたのではないだろうか。

戦争なんてクソくらえだ。(…)その光景は今でも焼き付いている。一方では赤ん坊が、一方では海兵隊が、そしてその他のすべての人がその残忍な支配に巻きこまれたのだ。<sup>❖<sup>10</sup></sup>

❖<sup>10</sup> 「大切な人たち (Dear People)」へ宛てられた手紙 (1944年7月10日)  
Hughes, *Shadow and Substance*, p.132.



図4  
“自殺しようとする市民たち”  
『ライフ』(1944年8月28日号)

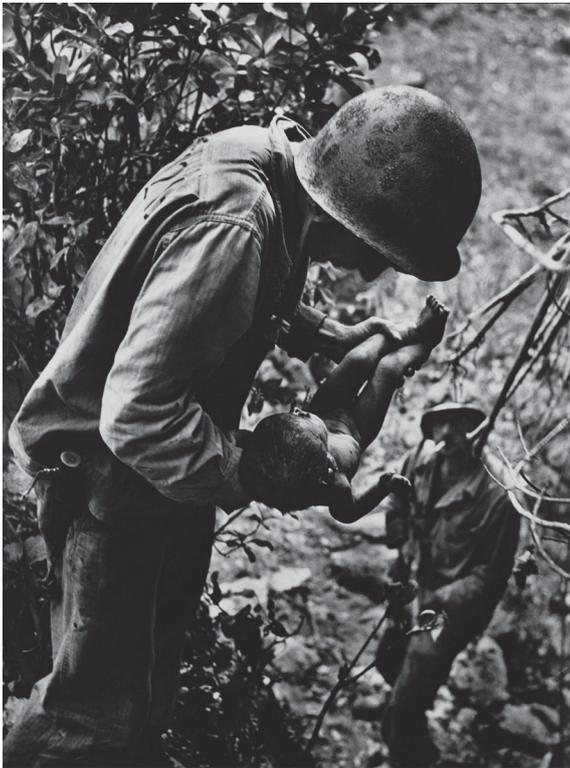


図5  
W. ユージン・スミス  
《サイパン（赤子を抱く兵士）》  
1945年、  
東京都写真美術館蔵

その経験を経て、スミスは兵士だけでなく、戦時下でも懸命に生きようとする民間人の姿にもカメラを向けるようになった。当初は日本人を軽蔑的に表現する「JAP」という言葉を使用していたスミスであったが、取材を重ねるうちに「Japanese」という表現を選ぶようになり、日本人に対する敬意を記した手記も残すようになっていく。実際に、洞窟から出てきた日本人に対してアメリカ兵が発砲しようとした際には「撃つな」と制止し、負傷した日本人少女を自ら病院へ搬送するなどの行動も記録に残されている。

スミスが戦場で捉えた一枚の写真——兵士の「死」と赤ん坊の「生」という鮮烈な対比を示した作品は、『ライフ』誌上で大きな反響を呼んだ【図5】。

1945年6月、沖縄戦での取材中に銃弾を受けて負傷したスミスは、病院に搬送後、そのまま終戦を迎えることとなった。この負傷が原因で、スミスは生涯にわたって戦場に足を運ぶことはなかった。

## おわりに

本稿では、当館収蔵のスミス作品やアーカイブ資料をもとに、W. ユージン・スミスの初期活動について再考した。スミスの写真家としての出発点は地元紙『ウィチタ・イーグル』での活動にあり、そこから父の自死という出来事を経験する中で、ジャーナリズムの本質に向き合う過程が明らかになった。その後、『ライフ』誌での活動を通じて、スミスは自身の写真表現を模索し、発展させていった。

特に注目すべきは、スミスが一貫して「人間の生」を追求し続けた点である。『フライング』誌時代には一時的に機械的な記録写真に従事せざるを得なかったが、『ライフ』誌の戦争特派員として太

❖11 石井「魂を撮ろう」82-83頁 なお、スミスの説得により助けられた日本人男性とは1971年に新宿・小田急百貨店で行われた展覧会で再会を果たしている。その際二人は抱き合ったが、スミスは自分が撃つのを止めたという事を明かす事はなかったという。アイリーンの証言より 同137-138頁

平洋戦線に赴任して以降、戦場での人間の姿を克明に記録し、自身の理想とする写真表現を確立していった。その後、スミスは2年間の休養期間を経て、〈カントリー・ドクター〉や〈シュヴァイツァー〉などの印象的なシリーズを次々に発表し、写真家としての地位を確立していくに至る。

本稿は東京都写真美術館が所蔵する約2,000点以上にも及ぶスミス作品の調査における第一歩として、その初期活動に焦点を当てたものである。この膨大なコレクションの全容を本稿で網羅的に論じることが困難だが、今後も継続的な調査研究を進め、スミスの写真表現の変遷についてさらなる考察を重ねていきたい。